

歌誌 黄雞「秋号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 アンソロジー 2010〜2015 VI

寒戻り地蔵の肩に雪の積むこの世の辛苦担うが如し

柔らかき光を浴びて芽吹く杉ひこばえ薬に見ゆる命の営み

アリウムが空にすつくと咲き居りぬわれ誘われ背を伸ばしおり

初夏の山ハートを象る残雪に見惚れて語らう妻とのひと時

尾根の道不意に現わる崖もみじ雲の切れ間のカーテンコール

龍の山歩みに連れ添う鳥の声一息つくたび歴史の舞台

足が冷え目覚める朝に鳩鳴けり暦見やれば寒露示せり

且坐の席帰路で見つけし彩雲に集いし仲間の家路を想えり

ブナ林木漏れ日の中佇めば心の憂さを秋風撫で行く

雪の無き路肩に荒草雨匂うテレビは連日被災地告げおり

携帯の避難情報鳴り響く秋の夜長に心ざわつく

隣席で黄ばむ「太宰」を読む人のこころを探り揺れるわが視線

いつの間に古希の足音近づきぬ今朝も日課の龍頭を巻きたり

人により嘘も方便意味変わる子供も親も教師も窮す

ハレの日に笑みを探して髭をそり鏡の中に老いを見る朝